

中国山西省における日本語教育

張 泓明

人間社会環境研究科 博士後期課程 2年

1. 派遣日程・訪問先

1978年の改革開放以来30年あまりの時間が経過したが、その間の中国の政策路線の変化はさまざまな方面に影響を及ぼした。一連の政策転換のプロセスの中で、一般中国人の意識もまた大きく変化した。変化が及んだ分野は様々あるが、言語教育の分野は最も早く影響を受けた分野であり、影響はさらにその後多様な分野へと広がった。

今回の調査では、中国の一地方である山西省において日本語教育がどのように開始し、経済発展とともにどのように変化していったのか明らかにすることを目的としており、歴史の経過をたどりつつ、調査成果とその分析について述べたい。

今回の調査は2012年7月31日から10月4日の65日間に実施した。調査期間中に日中摩擦が不意に深刻化し、日中間の友好往来も急に冷え込むという出来事があった。調査地の山西省の省政府所在地である太原でも、9月ごろ参加者千人ほどの反日デモが起こったのははじめとして、各地で反日姿勢を示す行動が次々に起こった。調査に際しても支障が生じ中断すること



図1 町中に反日姿勢を示すデパート

もあったが、これをきっかけに、日本に対する人々の感情、それを左右する日本文化の位置を確認できた。

2. 調査の内容—日本語教育の背景

本稿は、今回の調査対象地である山西省における日本語教育機関や民間教育機関を中心として、インタビュー調査や当事者からの伝聞に基づいて、関連する文献と照らし合わせて実証しつつ作成したものである。本稿を通じて改革開放以降の山西省における日本語教育機関の全体像とその変遷過程、そしてその原因を解明することを目的としている。

山西省は中国の一地方としてほかの地域と同じく、1895年の日清戦争以降、多くの人々が地理上、文字、アジア人として共通性がある日本で富国強兵の道を探り始めた。その20世紀初頭の第一世代の一人が後に山西省の督軍になった閻錫山(1883—1960年¹⁾)であり、閻錫山は日本で孫文の中国同盟会に参加し、帰国後間もなく辛亥革命の波に乗って、山西省に割拠する軍閥にまで成長した。

閻錫山はその一代世代の留学生だが、彼以降も留日学生は続出し²⁾、1936年時点で留日学生は60人ほどいた。その内訳は20代後半の学生が殆どであり、それを元に計算すると、彼らは改革開放の80年代にはすでに60歳を過ぎ、定年の年齢に達していることになる。まして当時の留日エリート層は、建国以降の大変動時代の渦中に巻き込まれ、中国国外に出るか、あるいは中国国民党の退陣とともに台湾へ渡った場合も多かった。また、文化大革命中に国外との繋がりがあため、酷い目に会った人もいた。

そういう理由で、1980年代に教壇に立って教鞭をとり、流暢に日本語を操ることができる教師は僅か数人であった。山西大学の日本語専攻創設(1977年)に当たっては、山西省内で人材を募集すると同時に中国全土、中でも東北三省(遼寧、黒竜江、吉林)から、

日本語のできる人材を招聘した。改革開放以前の鎖国の時代には、イデオロギー上の観点から、日本語の上手な人間は日本軍国主義と繋がりがあると見なされ、スパイ容疑者として監視され、日本と関係のない職場に配属されるというのが一般的な措置であった。

日中平和友好条約の調印後、対日貿易が再開されると、多くの日本語の堪能な人材が必要になった。山西大学の日本語専攻学科の設置は、文革によって中断されていた全国統一入学試験が再開された1978年とほぼ同時であった³⁾。そして、それまで重要視されたロシア語が下火になってきた。日本語専攻学科の設置は日本との交流や友好協定の締結を促進した。山西省と埼玉県(1982年)、山西大学と立教大学(1985年)の友好協定の締結は、若手教員に研修のチャンスを提供した。貴重な国外での1~2年の研修を終えて、日本にそのまま残留不帰の人、あるいは一度本籍の山西省に戻ってもすぐ他の大学に籍を移す人が多数いた。

山西省は発展の遅れている内陸地域にあり、インテリに対する待遇が低く、また進路となる日系企業や就業場が少ないことから日本の存在感も薄く、日本語に熟達した人材が専門性を活かせる場がないというのが原因である。現在山西省において日本語教育に携わっているのは、出身校が山西大学、または出身地が山西省の人がほとんどである。山西大学を卒業した学生も2000年代以前(日本語学科は2年1回募集し、1学年20人前後)は山西省外の企業に就職していたが、2000年以降はその主な就職先は省内の日本語教育機関に変化した⁴⁾。2003年以降、教育改革に伴う大学生の拡大募集一期卒業生は深刻な就職氷河期に遭遇した。就職問題の対応措置として、就業先が見つかりやすい日本語専攻などの分野に志望先を転換したが、現在は日本語専攻も同じく就業難の問題に直面している。

一方、公立教育機関に付属し、学歴は自考(独学試験)に任せる学内付設の日本語育成訓練所も現れた。その対象は入学統一試験を通過できなかった日本語に興味を持つ学生である。一般大学の授業料に比べて倍程度の金額を納め、年制も大学の通常どおりに設定されている。大学学生と最も異なる点は、毎年所定期に開催される全国自考(独学試験)に参加することである。所定の科目に全て合格すれば、学歴として中国の国家教育部に認定される。主催するのは各大学の各学院である。授業料は各学院にとって重要な収入源になっており、年末にスタッフに支給されるボーナスの財源である。

完全に民間の教育機関としては、80年代に現れた科技日本語の普及を目的とし、工作上必要な内容に絞って訓練する「速成日本語」と呼ばれた講座があった。輸入した日本製工業機械や電気製品の使い方に対応するという目的があった⁵⁾。速成というのは、簡単な日本語助詞を勉強し、それと漢字を組み合わせる意味を推量する日本語学習法である。短時間で日本語を身に付けられるという利点があり速成日本語学習法は一時的に流行ったが、「喋れない」という点を指摘する人もいる。

一方で、文化大革命が終わり、従来長い間続いていた「紅專」⁶⁾の議論について、鄧小平から「專不等于紅、但是紅一定要專」⁷⁾という結論が下された。開放以降、知識の重要性が人々に認識された。開放によって、国際視野を備え持つことが教養の一つとして要求されるようになった。また外国語も一種の技能のような物として認識された。そのような環境で日本語学習ブームは50年代末から60年代生まれの人々の間に広がった。その世代の多くの人々が、何を勉強しようか迷った際には、先ず外国語を習得しようという考えを起こした。社会主義路線転換の中で、それまで触れてこなかった資本主義先進国の欧米諸国や日本は魅力を持っていたのである。当時、60,70年代に大きな経済成長に成功した日本を師として経済を発展させるという考えが生まれた。加えて戦争中の日本人との触れ合いによって親近感を持っている民間人が存在した。民間日本語教育者の白松鶴氏、山西大学日本語教師の曹石堂氏はその内の代表的な2人である。

定年を迎えた文化知識人が朝の時間を利用して、「雷峰に学ぼう」というスローガンに倣い、ボランティア



図2 「雷峰に学ぼう」活動中の若者姿、紅い腕章の文字は「為人民服務」

精神を持って開催された日語晨会コーナーがその一例である。

姉妹都市、友好学校などの友好協定に基づいた日本への人の流動も現れた。当時雲泥の差であった経済状況から、日本へ留学や研修する風潮は東南沿海部の上海から地方まで広がった。山西省も日本と関係のある人々が、自身の人脈パイプあるいは仲介ブローカーに依頼して、人々を日本に送り出し始めた。それを契機に、民間の日本語教育が一層発展していった。

2003年前後、鴻海精密機械会社という台湾企業は加工製造業のコストダウンを目的に⁸⁾、山西省に家電製品やパソコンの生産工場を作った。この会社は世界に大きなシェアを持つ日本電気ブランド品の下請け工場になった。日本の会社の発注に応じて生産を行う。日本の会社はその生産品、品質、生産環境を把握し、委託方の意志通りに生産できるように常に長期滞在駐在員を派遣し現場監督をしている。鴻海も日本の会社の要求に対応するため、品質向上の目的で日本人技師を雇い、現地で日本語通訳を雇い、日本語のニーズを作ってきた。

現在山西省における日本語教育の背景にはその幾つかの脈絡が引き継がれており、山西省の日本語教育を感知できると考える。

3. 公立大学日本語教育機関—山西大学

山西省内に日本語専攻学科を開設する4年制大学は3校ある。山西大学日語言語文学系⁹⁾(1977年創設)、山西财经大学経済貿易日本語(2001年創設)、山西師範大学日本語教育(2001年創設)である。このほかに日本語を教える大学は多数あるが、英語教育を補充する第二外国語として教えられているか、又は私立、短期大学の開設する専攻学科があるが、これらは連続性と安定性の両方に欠けている。山西大学は日本語専攻の開設がもっとも早く、伝統と権威が省内屈指である。このような理由から、山西大学に絞って大学教育機関における日本語教育の変遷を紹介する。

山西大学は1902年、宣教師のティモシーリチャード氏(Timothy Richard)の提議で設立された、中国でも早く設立された三大学の一つで、当時の専攻分野は中斎、西斎および訳書院から成っていた。その後英文や西斎は当校の重要な内容として続けられていた。

1949年の中華人民共和国成立当初、ソ連と緊密な関係があったため、ロシア語に習熟した人材の育成が

急務となり、ロシア語専攻学科を創設した。

1951年、文系知識は教育に服務すべしという理念から、理学、文学などが師範学院に併合された。

1952年以降、イデオロギー対立により英語専攻を廃止し、外国語はロシア語だけ残された。

1953年、工学院が独立し、単独で太原工学院になり、その後現在の太原理工大学になった。また、師範学院が独立し、単独で山西大学師範学院となり、その後現在の太原師範大学になった。

経緯は以下のとおりである。

1953—1961年、学校名さえ使用停止となる。

1961—1966年、学校名回復

1966年—1976年、文化大革命、工農兵の推薦入試を実施

1977年、山西大学日本語専攻を設置

1999年、フランス語学専攻を設置

2003年、独語学専攻を設置

以上、山西大学外国語学院ウェブサイト資料に基づいて作成(<http://wy.sxu.edu.cn/yxjs/lshg/29389.htm>)

山西大学の日本語専攻は、開設当初全国規模で人員を募集し、特に戦前日本から大きな影響を受けていた東北三省から日本語に堪能な人材を山西大学に招聘し、専任日本語教師を担当させた。1985年の山西大学と立教大学の友好学校協定や1982年の山西省と埼玉県友好都市協定締結を契機に、山西大学の日本語教師は日本での研修チャンスを獲得した。

建国から80年代にかけて、中国の特別な政治状況により1930—50年代生まれの日本語に習熟した人材はほぼ空白である。それ故、次世代教育者の養成と引き継ぎが良くできなかった。文化大革命中の日本語教師との出会いから、筆者は当時の日本語教育の様子を伺うことができた。

孫鳳翔氏(1924—2003年)

1924年、浙江省紹興市生まれ。若い頃日本の法政大学に留学し、途中で中国に戻り、政府が各週発行する広報誌『週報』¹⁰⁾の編集者となった。その後日本占領中には山西省長王鑣の通訳を担当していた。

解放後に政治運動の衝撃を受け、散々職場を転々とする事になり、山西公学、太原市工商局、山西省財政庁、太原市公安局、襄汾県水利局などに転職した。

改革開放以降の山西大学歴代日本語専任教師

名前	生没年	出身	出身校	日本研修先	その他
孫鳳翔	1924年— 2003年	浙江省紹興市	日本法政大学		山西大学で 定年
曹石堂	1929年— 2012年	山西省沁県	日本立教大学		山西大学で 定年
李愛文	1953年	北京	北京対外貿易 学院(1979年)	1988年立教 大学	転出(対外経 貿易大学)
傅萌	1954年	北京	第二外国語学 院	東洋大学	転出(対外 経済貿易大)
張麟声	1956年	山西	復旦大学 (1978年)、北 京外国語大学	1997年大阪 大学	転出(大阪 府立大学)
梁繼国	1955年	山西	黒竜江大学 (1980年)	1985年立教 大学	転出(茨城 大学)
孫玉林	1957年	山西	山西大学 (1983年)	1992年立教 大学	転出(山東 大学)
呂静萍	1956年	山西	山西大学 (1983年)	1990年立教 大学	転出(山東大 学)
張耀武	1959年	山西	山西大学 (1985年)	立教大学	転出(大連外 国語学院)
張岩紅	1962年	山西	山西大学 (1985年)	立教大学	転出(大連外 国語大学)
宋徳強	1963年	山西	山西大学	福島大学 (1999年)	在籍中
米彦軍	1970年	山西	北京外国語大 学、南開大学	日本学芸大 学、立命館 大学	在籍中

*筆者のインタビュー資料に基づいて作成

1978年から山西大学の日本語教師になった。日本語研究室主任を担当し、1985年『新日本語』という教材を編纂した。その教材は活用範囲が広く、好評を博した。

定年後、山西省民主同盟省部連絡工作委員会に勤めながら、1989年に山西省の民主同盟社会大学を創設した。民主同盟社会大学はその後、3年制の私立学校日本語教育学院に改組した。戦時中山西省にいた川野和子氏の手によって、四国高知県にある土佐情報経理専門学校と姉妹校となり、中国人留学生を日本に送った。孫鳳翔氏が世を去った後、日本語教育学院が旧日本留学生の王氏に引き継がれ、日本語教育をしながら留学仲介もしていた。現在学校は経営不振から、名称も山西外国語専修学院へと変更されている。

山西大学日本語専攻学生の就職先や就職率は公的機関から情報が公表されていない。山西大学就業指導センターの知人の話によると、現在公布されている就職率は信憑性がなく、現在日本語専攻の卒業生は大学院に入る割合が高く、職場も教育機関が中心であると言われている。

曹石堂氏(1929年—2012年)

山西省県生まれ。出生後数々の辛苦に見舞われた。その後占領下の日本鉄道部隊に引き取られて生活し、「兵隊太郎」という名前で馴染まれた。鉄道工兵隊の移転と共に北京の長辛店小学校で勉強、その後、日本人義父に連れられて、日本本土に渡り、高校や大学まで行った。

1949年建国以降憧れた社会主義中国に戻り、第一機械部の日本語翻訳職を務めた。その後、「反右運動」で告発され、刑務所に入れられた。農場や炭鉱などを転々とし、生活の辛さを痛感した。1980年に山西大学専任日本語教師になり、日本を訪問し立教大学と山西大学の姉妹校協定を結び相互の交流を推進した。彼の日本訪問も珍しい事例として日本全国に大きな反響を呼んだ。

定年してから北京の日系ゴルフ場などに通訳として勤務し、鬱病があった妻と離婚後は、山西大学の日本人留学生熊林咲子と結婚した。熊林咲子はその後山西財經大学の日本人教師になった。曹石堂氏は2012年初めに亡くなった¹⁾。

4. 民間日本語教育機構—白松鶴氏、日本語晨会と晨会日本語学校

4.1 白松鶴氏

白松鶴氏は現在91歳。1921年生まれ、山西省民間日本語学校日本語晨会の創始者である。白松鶴氏の孫娘に紹介されインタビューに応じてもらったが、彼は耳が遠く、文化大革命に遭遇したせいか、話題に常に



図3 筆者と91歳の白松鶴先生

警戒心を持っていた。手帳は常に手元に置き、何十年前に起ったこともノートに記述されている。日本に憧れ、20年前の日本訪問時の招待に感動したことが会話の中に伺えた。取材時に彼の家の本棚に日本の90年代に発行された週刊誌、週刊新潮や週刊文春などが積んであった。筆者に対して、「本は私のもっとも重要な宝物である。これらは全部日本の友達から贈ってきた物だ。今度日本から帰る際には週刊誌を持って来てくれ」と話していた。

先祖は山西省大同靈丘県、父親は清朝末期に伯父と共に軍に入隊し、新軍85標の班長を務めていた。1911年の辛亥革命では太原で蜂起をし、革命成功後は兵隊の排長に昇進した。1928年連長まで務め、その後退役した。故郷の靈丘には戻らず、そのまま太原に残った。1937年の冬、日本軍が太原に入った年に白松鶴氏は16歳。生計を助けるため、占領中の日本軍の小遣役になった。日本語の独学も始めた。当時日本語は現在の英語と同じように、勉強してすぐ使える実用的なものであったため、多くの人々が学んでいた。翌年1938年から日本語学校に入った。

太原市の大南門虎特街の天理日本語学校¹²⁾(天理教の学校)に入った。初級中級合わせて30人ほどの学生がいた。学長の高倉庄三郎という人物と合わせて3人の日本人教師がいた。その頃日本語学校はもう一ヶ所あった。西本願寺日本語学校¹³⁾という名称で、現在柳巷海子辺の児童公園の場所にあった。4ヶ月ほどの勉強や訓練を経て、当時の公務員訓練所(特高警察教練所)で日本教官の顧問や秘書を勤めながら、日本語講師として中国人職員に教えていた。

解放後、山西公学に入り、卒業してから省工業庁の「山西工業通訊」学習委員会主任や文工団の副団長などを歴任したが、1952年から幹部の審査運動で労働改造2年の判決を下された。1955年「反革命」分子、1956年四類分子(地主分子、富農分子、反革命分子、壞分子)としての識別を受けたため、戦後政治運動動乱期の長い間、「地主」、「漢奸」、「売国奴」と呼ばれていた。階級闘争の時代で打倒の対象となった歴史が20年余りあった。1979年の改革開放で、選考を通過して太原師範高等専門学校の日本語教師になった。当時師範高等専門学校の日本語の教師4人は中国東北部などの山西省外から招いたのである。先生になってから間もなく定年退職し、1983年外国語勉強ブームや「雷峰に学ぼう」¹⁴⁾運動に呼応して、上海の日本語コーナーを真似て、太原市内に日本語晨会を創立した。

4.2 日本語晨会

晨会日本語学校の専任梁氏は、日本語晨会と晨会学校の歴史は改革開放以降の山西省における日本語教育の歴史とほぼ一致すると語る。梁氏は1963年生まれ、退職時には山西青年報新聞社の契約社員であった。現在晨会日本語学校の事務局を担当している。子供1人は、現在東京の日本語学校に留学している。息子の大学入試を心配しており、マスメディア専攻の入学情報を探してくれと筆者に依頼した。現在晨会日本語学校の経営を担当している白松鶴氏の孫娘の近隣住人として学校に招かれ、事務局の専任担当者になっている。

起源

1980年代改革開放当初、勉強ブームが起こった。何十年間も抑圧された知識に対するハングリー精神がマグマのように流れ出した。特に50年代や60年代生まれの若年層の間に広がった。

日中国交正常化や鄧小平副総理の訪日などによって、日本についての報道制限が緩和された。新聞の中では従来の日本社会党や天気情報の報道だけではなく、日本国内の事情も訪日見聞のような形でしばしば見られるようになった。80年代の改革開放は、「四人組」の責任追及を通じて階級闘争が下火になった。社会主義や修正主義はともかくとして、経済を発展させるという目標を明確に持ち始めた。80年代の日本は先進技術が発達していることで有名であり、若い人達が憧れていた。しかしながら、戦時中日本占領期の被害者として、日本や日本語をボイコットする人も大勢いた。日本語晨会は露天の集まり会なので、日本語学習を邪魔する事件が何回も起こった。

「雷峰に学ぼう」活動の中に、新聞記事に上海市民が日本語コーナーを作るという記事を見て、それを真似て、山西省でも日本語コーナーを作るというアイデアが生まれた。その名称の「晨」は中国で朝を意味し、「会」は出会いを意味する。二つの文字を組み合わせ、朝に会おうということである。日本語晨会は自発的な活動の会である、3月初め頃、毛沢東の雷峰題字の日と合わせて、プロパガンダにされたスローガンに従ってボランティア精神に則り日本語教育を始めた。

時間、場所、参加者

日本語晨会はボランティア教育であるため、授業料は一切不要、教科書だけ参加者が準備をする。時間は朝6時前後、出勤する前の時間を勉強時間とする。毎週月～土曜日まで日本語会話を習い、日曜日は日本の歌を歌う。場所は最初、太原市内の迎沢公園で開催したが、80年代後半迎沢公園は入場券が必要になったので文化宮のガーデンに場所を移した。しかしここは自転車置場から遠く離れて不便なため、省体育館の東院に移った。開催場所はその後も転々とした末、1991年から五一広場の彫像下によりやく定着した。冬の寒い時期白松鶴氏の自宅に集まる以外は、毎朝五一広場で行われている。

日本語晨会は狭義の意味で学校ではなく、自由に参加できるという寄合会の特徴を持っている。その為、生徒数の変動が激しい。人数は新聞、テレビ等の報道に伴って上下する。1984年頃には20人ほどであった。しかしその9月に太原日報に報道されるや参加者は100名に上った。1985年から100名の学習者を4つのクラスに分けた。1987年3月の4周年記念大会には150人余りにさらに増加した。1991年の3月には5つクラスがあり、學員200名余りに上がってきた。

白松鶴氏は上代目の学生に新入學員の教師役を担当させ、日本語晨会が継続するのに合わせて日本語愛好者の輪も広がってきた。それと同時に、日本語晨会は旧山西省内に日本と触れ合いがあった人達の寄合会でもある。以下紹介すると、下記のような人がいる。

張治中氏。元太原衛生学校副校長（初級医療学校）。定年後に日本語晨会で教師を担当した。30年代に日本に留学したことがある。

李理森氏。鉄道工人。若い頃鉄道工場にて日本人と一緒に仕事をしたことがあり、数多くの日本語を覚えた。その後、日本語晨会の日本語会話を担当した。

黄金女氏。朝鮮族。日本人家庭に育てられ、太原第五中学（太原市内で一番にランクされる高校）の日本語教師、定年後に日本語晨会の教師を担当。

張仁甫氏。山西針織会社の運転手（定年）。早い時期に本人の経営する会社に仕事した経験があった。日本語晨会のボランティア教師になる。

張卓如氏。戦前は信託商店職員。日本人の友人、石川市太郎との手紙のやり取りを続けていた。日本語晨会の學員。

その後、晨会を卒業した學員や日本語を専攻する学生らが日本語晨会の教師になった。その一方で、太原

市内に留学、訪問する日本人も多数このような寄合会に参加し、特に山西大学の日本人教師はよく日本語晨会に参加する。日本語晨会の開放性は実際に山西省太原市の民間中日友好協会¹⁵⁾の機能を果たしていた。

教科書

時代に応じて、教科書の持つそれぞれの強みや弱点を考慮しながら日本語教育教科書を選択する¹⁶⁾。歴代の教科書と使用期間は以下の通りである。

『現代日本語』吉田弥寿夫 上海訳文出版社 1984年2-7月

『総合基礎日本語』楊寿、張生林編集 北京出版社 1984年5-11月

『日本語会話50課』大連外国語學員編訳 1984年9月-1985年6月

『日本語広播教材一冊』復旦大学編 訳文出版社 1984年9-12月

『初級日本語』1.2.3 日本NHK放送協会編 1985年3月-1987年12月

『新日本語』1.2 王二貴 孫鳳翔編 1987年3月-12月

『学日語』1.2 大連外国語学院、中央テレビ放送 編 1987年3月-1989年12月

『中学生日本語会話』 1988年8月-11月

『標準日本語』初級上、下、中級上、下 日本光村図書出版社 人民教育出版社 1991年以降

当時、日本語教材は日本語学習熱の高い所、すなわち東北三省や上海などで編集された教科書であった。日本語晨会を作った当初は、当時の「速成日本語」に対して、生きた日本語を強調し、日本語で会話できるように教えていた。そのため最初は教科書が無かったが、學員の要望に応じて、教科書の導入を考え始めた。様々な教科書に変わった後、1991年前後によりやく『標準日本語』に落ち着いた。

社会反響

1991年、太原市共産主義青年団が主催した外国語講演コンテストに参加した日本語参加者18人のうち、日本語晨会の學員は12人を占めていた。白松鶴氏もその業績により社会から様々な表彰を受けた。

日本との交流

1985年中国山西省太原を訪問した埼玉県議員大

野松茂氏（無所属）が迎沢公園にて日本語晨会の存在を知った。1986年同氏は狭山市市長選挙に出馬し、日本語晨会に応援を依頼した。その依頼に応じて、日本語晨会は応援電報を打った。その結果彼は願いどおり当選を果たした。

1988年5月7日NHKテレビの長井暁記者が、1990年には岩手テレビが白松鶴の日本語晨会を報道した。日本でもより多くの人が日本語晨会について知り、特に戦時中に中国にいた日本人の中国ノスタルジアを呼び起こした。

1986年山形県鶴岡市内の中央公民館にて、川上治夫氏は中国語講座を開いていた。彼は中国人留学生の教師から会の存在を知った。NHK報道をきっかけに、鶴岡市の中国語講座と姉妹校として協定を結ぶことになった。

1990年には鶴岡市の中国訪問代表团16人のメンバーが太原市を訪問した。姉妹校として協定を結ぶと共に白松鶴氏を日本に招いた。旅費全額が中国まで送られてきた招待訪問に白松鶴氏は今でも感動している。1991年10月白松鶴氏と専任教師の王氏は初めての日本訪問を達成した。

4.3 日本語晨会から晨会日本語学校へ

1990年代に入ると、日本語晨会は徐々に新たな問題が生じてきた。それは学員の募集問題と寄合会の存続問題である。

80年代は、ハングリー精神を持ち、知識を切に求めていた人が大勢いた。改革開放当初の言語能力は一

つの技能および進路拡大を意味していた。将来の進路に迷い、「何をするか決められないなら取りあえず外国語を勉強しよう」と考える人が多かった。90年代に入ると、目的を明確に持ち勉強する人が増えてきた。外国語ブームも下火になり始めた。

同じ頃、民営教育に対する要求も厳しくなってきた。特に民間教育の管理水準（事務局、校舎及び正式な統計、規範が要求されてきた）がそれなりに要求されるようになり、従来のボランティア方式の教育法は続けられなくなった。これは日本語晨会の存続に関わる問題になっていった。このような状況に対して、鶴岡市は日本語晨会の為に募金活動を行い、500万円（当時のレートで35万元）ほどの募金を集め、日本語晨会に送った。

1998年、民間教育申請法に基づいて「日本語晨会」から「晨会日本語学校」に改組した。太原市の第7中職業高校から校舎を借りて正式な私立学校に転身した。従来のボランティア制から1時限2.3元の授業料の納付を求めることにした。学校として経営するが、営利を目的とせずの方針であった。対象とする生徒も明確な目的を持つ人々を集め、留学や研修、大学院入試（外国語）、日本語能力試験への挑戦を目的として育成訓練するようになった。

90年代後期から経済貿易庁（商務庁）国際経済合作会社や労務派遣会社と提携協力する。研修生の派遣や労務輸出関係の日本語を教えた。2003年以降から山西省にある鴻海精密機械会社の労働者に日本語を教える。

2003年前後、SARSの影響で太原市内は封鎖された。借用していた校舎の期限が切れ、従来続いていた政府幹部の支持も幹部の退任とともに無くなった。SARS時期の学生募集難や白松鶴先生の高齢化と体調問題も併わさり継続が危ぶまれる時期を迎えた。

その事業を継続するため、晨会日本語学校は白松鶴の孫娘王梅に受け継がれた。2003年7月のSARS封鎖解除後、校舎も新たな場所である服装靴帽ビル（旧百貨店）の4階をオフィスとして借入、移転した。

現在は留学希望者の留学予備校や研修生の日本語育成の場として、仲介活動もしている。日本の看護学校向けの留学生仲介活動もしている。担当者の王梅校長によると、地価の高騰により単に授業料だけでは運営を維持できず、仲介業務の展開でようやく維持費用を賄えているとのことである。2011年の東日本大震災や放射能漏れの影響で、留学や研修意欲を持つ人の人

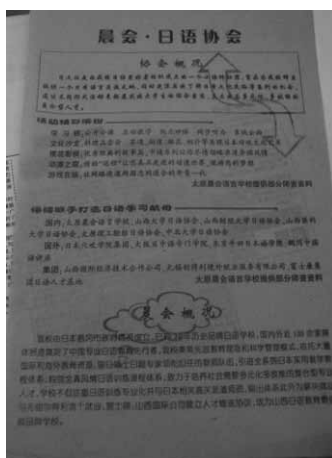


図4 日本語晨会のパンフレット

数が大幅に減った。さらに2012年は反日デモなどの影響で、現在、夏休みクラス、冬休みクラス、初級、そして中級クラスのいずれのクラスも通常の3分の1の学生しか応募してこなかった。訪問した際には、生徒は2、3人しか目にしなかった。

5. まとめ

今回の調査では、中国の一地方である山西省で日本語教育を実施している機関を、民間と公的機関に分けてそれぞれ調査し、分析した。

国際間の移動の発生に際しては、その前提として受け入れ国側の言語が送り出す側の国でどのように受け入れられたのか分析することが重要である。山西省の1978年以降続いている日本語教育の歴史を振り返って見れば、政治政策に大きな影響を受けた。中華人民共和国建国時には、ソ連との同盟外交政策に基づいて、各地でロシア語教育が英語に代わって、第1位の外国語言語となった。1960年代に、中ソ関係が悪化しても、同じ政治思想体制に基づく社会主義国家として、国家の運営システムが似ているところが多いゆえ、ロシア語の第一言語としての地位は変わらなかった。1978年の改革開放から、政府当局は政治上の軸足を経済中心に移した。ソ連への関心は徐々に西側諸国や日本に移っていった。

1980年代に入って、公的な機関の指導者不足は、民間の自発的な日本語寄合学習会の興隆とは鮮明な対比を見せていた。民間人の中には、従来の日との触れ合いの記憶が存在していた。そのような触れ合いの記憶から両国国民の間に架け橋をかけて、80年代の日本語教育や日本的雰囲気を作る機能を果たした。

しかし、市場化が進むにつれ、単純に自発的な日本語学習は下火になった。その代わりに、求職や、外国語能力認定試験、日本への出張の為など、明確な功利目的を持つ日本語学習者が増加した。また、政治が中心的な影響を持たなくなったにもかかわらず、相変わらず大きな影響を及ぼしている。その実例として、2012年6月以降の両国間のねじれ関係は、日本語学校の生徒募集にまで影を落としている。

このような中国における社会変革の日本語教育の変化の分析は、現在筆者が行っている移民研究に繋げて考えることができ、現在日本の中国系移民、そして改革開放以降の変化の解明に際して一助になると考える。

- 1) 1904年日本に留学、留学先は振武学校や日本陸軍士官学校。
- 2) 本籍が山西省出身である留日学生が60人。中華民国廿五年(1936)日本昭和11年留日学生リスト、『近代中国史料叢刊』第67輯台湾文海出版社、『山西省文史資料』1996年04月。
- 3) 1977年に始まった「高考」は、同時の状況を再三論証してから始まった。当年度の10月中旬から教育部から知らせを發し、12月の11日と12日に試験、入学するのは1978年の2月になった。
- 4) 大学院に進学、修了後に日本語教育機関に務める。
- 5) 当時の山西省内には商品不足という問題があり、一般人は必要な家電製品を手に入れることがなかなか難しかった。機能や品質の評判が良い日本製は深刻な供給不足であった。そのようなニーズに応じて、特に有権者の子女や親戚等が権力を利用して不法輸入も展開した。その不法輸入品の表示はほとんど生産国の文字表記である。また、正式な輸入品でも中国語訳が不備という問題もあり、輸入工業品の使用法問題でよく悩んでいる。
- 6) 「紅」はイデオロギーのプロレタリア、「專」は一定の技能を持つことを意味する。毛沢東時代は「又紅又專」を強調する、特に「紅」と「專」の順番を強調した。鄧小平時代はその意味を弱めた。
- 7) 『鄧小平文選』第2巻、人民出版社、1994年、p262。
- 8) 代表の郭台銘氏は祖籍が山西省と自称しており、故郷に報いる事が目的という。
- 9) 学部に相当。
- 10) 「週報」の発行機関は1940年設立の情報局であり、大東亜戦争中の週報は比較的入手しやすい。
- 11) 参考資料として、『祖国よ、私を疑うな』日本経済評論社、2006年及び立教大学経済学部創立100周年記念シンポジウム「中国のナショナリズム 日本へのナショナリズム」2006年12月8日を挙げる。
- 12) 山岡政紀：天理教における日本語教育の国際的展開『比較文化研究』第15巻、創価大学比較文化研究所、113-133 1998.3.20、深川治道：「天理教の日本語教育史(5)華北の日本語学校について」(『天理大学おやさと研究所年報』9号、2002年などの研究がある。
- 13) 当時の資料を調べたところ、1939年山西省立第一師範学校の日本語専修科は一期生228名を募集した。『百年師範—太原師範校史』によると、当時山西省太谷農場学校などに駐在日本語教員がいた。国立公文書館亜細亜歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/MetaOutServlet>
- 14) 共産主義中国以前、小作農の息子だった雷峰は孤児として育つ(母親は彼が7歳の時地主に強姦されて首吊り自殺したといわれている)。辛酸をなめた貧しい生活の中で育った雷峰はやがて人民解放軍の兵士となった。苦勞を厭うことなく、負担の重い仕事に従事し、人知れず被災地の人々に募金をし、数々の善行を行った。部隊の戦友たちはもちろん、数多くの庶民たちもこの解放軍戦士を称賛した。1962年8月15日、雷峰が殉職すると、新華社や『人民日報』、『解放軍報』、『中

国青年報』など全国主要メディアが揃って雷峰の非凡で偉大な業績を書きたてた。1963年3月2日の『中国青年』では、史上初となる、毛沢東による題辞「雷峰同志に学べ」が発表された。3日後の3月5日、『人民日報』、『解放軍報』などがトップで毛沢東の筆稿を掲載した。後に、毎年3月5日が「雷峰に学べ記念日」となった。

- 15) イデオロギーの影響で、中国民間人組織の友好協会は存在しておらず、実施内容に最も近いものでは僑弁の附属部門に人民対外友好交流協会があった。
- 16) 日付期間は日本語晨会にての使用時間。